

本学校園 幼小中一貫教育について

1 一貫教育主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究

(1) 「豊かな『社会生活』を創造する」とは

① 定義

まわりの人々や環境と共生し、お互いに磨き合い、よりよい暮らしを創りあげると共に、よりよい自分を創りあげる。

現代は、社会・経済構造が急速に変化し、複雑化・多様化する社会である。そんな社会や時代の要求に応えることが、教育にも求められている。テクノロジーの変化に対応し、協働的に自律的に行動できる力を、4歳児から中学3年までの11年間を通して一貫して育て、「豊かな『社会生活』を創造する」人間を育成したいと考える。

具体的には、互いに尊重し合う人間関係形成能力、基礎的・基本的な知識や技能に裏打ちされた思考力・判断力・表現力といった確かな学力、社会の諸問題に目を向け、課題に対応できる力を、子どもたちに育てていきたい。そこで、子どもたちの学びにおいて、より具現化した資質や能力などを本学校園では次のように構造化してとらえている。

② 「豊かな『社会生活』を創造する」資質や能力の構造

「豊かな『社会生活』を創造する子ども」を、大地に深く根を張り、大空に向かって大きく枝葉を広げる大樹としてモデル化した(図1)。家庭・地域や附属学校園を土壌とし、根を下ろした種子である子どもたちは、初等部前期・初等部後期・中等部という教育研究ブロックを通して、年輪を増やして幹を太くしていくがごとく、多くの資質や能力を身に付け成長していく。

そして、附属学校園を卒業した後も、身に付けた資質や能力が将来にわたって通用する生きた力となり、大きく伸びて欲しいという願いを込めている。

本学校園では、資質・能力を八つ示している。知識・技能については、各教科を中心に子どもがしっかり習得し、この知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力を育成したいと考えた。知識・技能は活用することによって、断片的なものではなくなり、次なる課



図1 一貫教育で目指す子どもの姿

題や日常のくらし，社会生活でいかされる構造的なものになる。

また，人間関係力や道徳性もしっかりと育まなければならない。人間は一人では生きていけず，自分を取りまく他者からの影響を受け，自分も他者に影響を与えながら生きていく存在である。したがって，思いやりをもち，他者と円滑な人間関係を構築したり，他者の意見を尊重しつつ，自分の意見とのバランスを図ったりして，よりよく生きていく力が大切になる。学校という組織化された集団の中で育まれた人間関係力や道徳性は，将来，人と人が関わり合い豊かな社会を創るための礎になるはずである。

さらに，子どもたちが主体的に取り組むための追求力や企画・実行力を大切にしたい。子どもたちにとって，生活の中で見つけ出した課題に対して自分の考えをもち，その解決に向けてこだわりをもって調べ続け実行することができる経験は，達成感や成就感を味わわせることができ，自己肯定感や自己有用感を高めるものとなる。また，これまでの自分や今の自分を振り返り，これからの新しい自分を見つけていこうとする学び方を獲得し，将来にわたって学び続けていく意欲につながるものとする。

これらの資質・能力は，それぞれ単独で機能したり，伸びたりするものではない。互いに関連をもちながら，スパイラルに高まっていくものである。私たちが目指しているものは，一人一人の子どもが大樹のごとく育つことを願い，本学校園のすべての教育活動を行うことである。

(2) 一貫教育主題を実現する柱

先に述べた一貫教育の主題を実現するためには，それを支える強力な柱が必要である。この柱は，学校園の運営体制や子どもと教職員の結びつきであり，あるいは，日常に行われる保育・授業が要となるものである（図2）。

「教育課程・研究」の柱では，一貫教育研究主題を受け，研究主題を，「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」と設定している。豊かな「学び」をつくる子どもの姿は，「思いやりをもって，集団の一員であることを自覚し，知識・技能，学び方を習得し，これを活用する思考力・

判断力・表現力を身に付け，課題解決を目指して，豊かなものの見方や考え方，自分自身への気付きの獲得を求めて学び続けていく姿」であると考えている。この姿を求めて，日々，授業研究を行っている。



図2 一貫教育を支える柱

一貫教育主題	豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究
研究主題	豊かな「学び」をつくる子どもの育成

「子どもの絆」の柱は，子ども同士の交流を軸にしたよりよい人間関係を形成していく試みである。「教職員の協働」の柱は，教職員の願いを集結させ，11年間を見通して子どもを育成するための意識や資質・能力を高めていく取組である。また，「子ども支援」の柱は，附属学校園に通うすべての子どもに対して，一人一人の教育的ニーズに応じた支援を充実させることを目的として行うものである。

このように，図1は一貫教育の目的を示しており，図2は一貫教育を推進していくための手

段を表している。すなわち、図1と図2は表裏一体の関係にあり、一貫教育で育みたい八つの資質・能力は、これらの「教育課程・研究」「子どもの絆」「教職員の協働」「子ども支援」の柱に支えられ、育まれていくのである。

2 一貫教育グランドデザイン

一貫教育の主題を受け、具現化するための指針となるグランドデザインを策定した。

(1) 一貫教育のビジョン

本校の一貫教育には、大きく三つの特徴がある(図3)。

一つは、幼小中一体の学校運営である。一貫教育は、幼稚園と小学校、中学校の運営体制が整い、全教職員の意識が同じ方向に向かってこそ、創りあげていくことが可能となる。校務組織や時程の調整などのハードの部分の統一とともに、教職員が一枚岩となれるよう合同の会議を行ったり、大学教員と協働して研修会を営んだりして、ソフトの面も充実させている。

二つには、系統的・継続的な指導がある。保育・教科指導や生徒指導を、幼小中11年間を見通して行うところに力を注いでいる。幼稚園から小学校、小学校から中学校への節目を重視しつつ、4・3・4教育研究ブロック毎に指導の重点を定めて、指導を行っている。各教育研究ブロックの区分けとブロックごとの方針を示す(表1)。

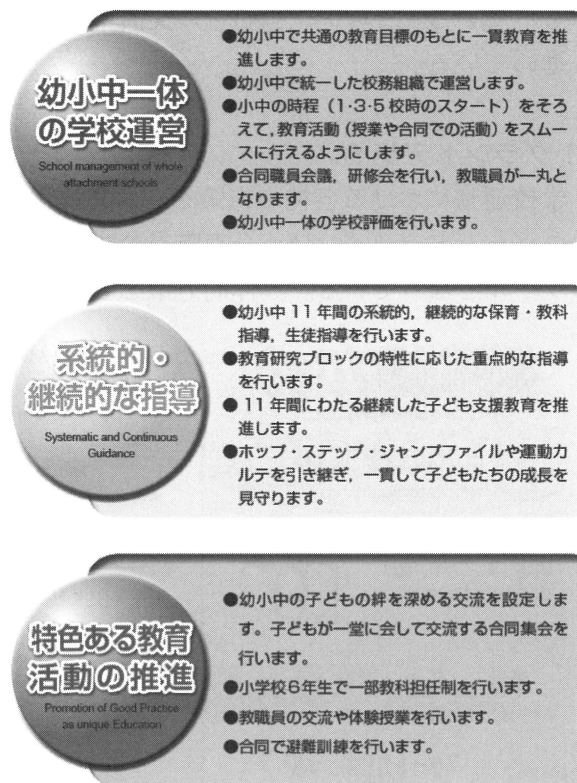


図3 一貫教育の特徴

表1 教育研究ブロックの区分と方針

■初等部前期ブロック■	幼稚園年少(4歳児)～小学2年生
自立への基礎づくり	
<p>○基本的な生活・学習習慣の定着を図るとともに、体験を重視した活動を通して、自ら探究していく基礎を培う。</p> <p>○集団的な活動や豊かな体験を通して、学校生活に適應する力を育む。</p>	
■初等部後期ブロック■	小学3年生～小学5年生
集団の力を伸ばす	
<p>○問題解決的な学習などを通して、基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。</p> <p>○人とのかかわりを通して、相手を思いやり自らを高めようとするよりよい人間関係を醸成する。</p>	
■中等部ブロック■	小学6年生～中学3年生
自己実現をめざす	
<p>○主体性を基盤とした深化・発展的な学習を通して、応用する力や活用する力を培う。</p> <p>○将来に向けた視野の拡充を図ることによって、よりよく生きようとする意欲と態度を伸長する。</p>	

三つには、特色ある教育活動の推進がある。合同集会は、幼小中の子どもが年に2回一堂に会し、交流することにより絆を深める取組である。一方、教育課程の面では、幼稚園年長から小学校1年生をつなぐために、スタートカリキュラムを導入している。また、6年生の一部教科担任制（本年度は、音楽と家庭科）では、中学校の教員が小学校の授業を担当している。子どもたちの学習への興味・関心をより喚起し、子どもたちの学びをより充実させていくことをねらっている。その他、教職員の交流や合同での避難訓練等を行い、本校ならでの一貫教育を進めている。

(2) グランドデザイン

学校運営における各柱の方策をさらに具現化したのが、グランドデザインである（図4）。このグランドデザインは、全教職員の意識をつなぎ、共通理解のもと共通指導をしていくためのツールとなっている。具体的方策を3にて述べる。



図4 グランドデザイン

3 一貫教育を推進する具体的方策



「教育課程・研究」の内、研究の方策については次章で述べることとする。ここでは、三本の柱「子どもの絆」「教職員の協働」「子ども支援」の取組について紹介する。

(1) 「子どもの絆」の柱

人間関係力や道徳性を高めるべく、子ども同士の絆を深める取組に力を入れている。特に、施設隣接型の環境を生かし、子ども同士の交流を軸にした幼小接続期の取組や小中接続期の取組、幼小中全体のつながりを意識した取組を行っている。それぞれの活動において、人間関係力の育成、自己の生き方を追求する力の育成等、ねらいを明確にして進めている。

① 幼小接続における絆づくり

幼稚園と小学校低学年の子どもたちが交流することにより、様々な場面における人とのふれあいを豊かに経験し、コミュニケーション能力を育成することをねらいとする。

年長児と小学校1年生の交流活動	
「わいわいランド」	「交流給食」
<p>1年生にとっては、活動を計画し進めていくなど、自分の立場を意識して取り組むことができる。</p> <p>年長児は、その姿を見て、小学生にあこがれをもつ。この交流で生まれた絆は、小学校に入ってからも続いている。</p> 	<p>1年生がお世話をしながら給食を準備し、会食する。1年生は、役立ち感を感じることができる。</p> <p>年長児は、小学校生活を味わい、入学への期待が一つ増える。</p> 

② 小中接続における絆づくり

小学6年生が中学校の音楽会に参加したり、中学生が小学校の外国語活動に参加したりしている。互いの学校の雰囲気を感じ取り、見通しやあこがれをもつことができる。

音楽会 小学校 → 中学校	外国語活動 中学校 → 小学校
<p>小学生が、中学生の様子にふれ、これから自分が歩むであろう中学校生活に夢をふくらませ、願いや目標をもつことができている。</p> 	<p>中学生にとっては、自分なりに工夫して外国語の楽しさを小学生に伝えることにより、自信を醸成することにつながっている。</p> 

③ 幼小中全体のつながりを意識した絆づくり（合同集会）

附属学校園の子どもたちが一堂に会し、一人一人が本学校園の一員であることを自覚し、仲間意識を醸成することをねらいとしている。毎年、生徒会が趣向を凝らし、絆を深めるための交流を行っている。



(2)「教職員の協働」の柱

① 教職員体験交流

異校種のくらしを観察・体験することを通して、各発達段階における子どもの実態を実感すると共に、各学校園の取組・文化への理解を深め、幼小中一貫教育のさらなる推進を図ることをねらいとしている。以下の2通りの体験交流を行っている。

■体験交流1：それぞれの学校園で一日を過ごすことにより、文化を吸収することを目的としている。子どもの成長の様子をとらえると共に、自己の指導に生かすことに結びついている。



■体験交流2：自己の専門性を生かし、一単位時間の乗り入れ保育・授業を行う。実際に保育や授業を行うことにより、子どもの発達段階を実感することができる。子どもにとっても新鮮さがあり、いきいきと活動する姿が見られる。



② 大学教員との共同研究

研究を進める際には、幼小中の教員が保育や教科毎のチームに所属し進めている。そのチームに大学教員も共同研究者として加わり、毎月1回程度研修会を行っている。実践と理論の統合により研究推進の一翼を担っている。



(3)「子ども支援」の柱

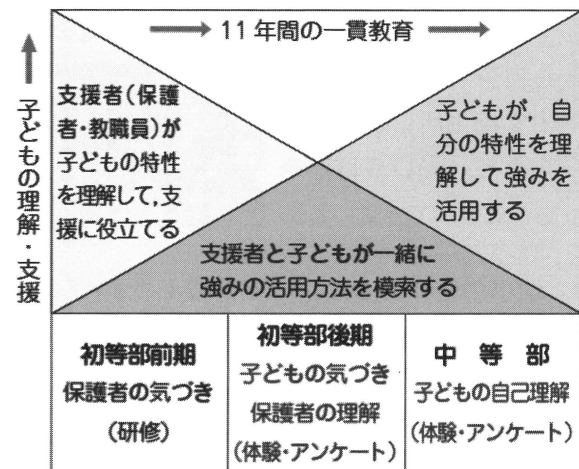
附属学校園に通うすべての子どもに対して、一人一人の教育的ニーズに応じた支援を充実させることを目的とする。また、一貫教育の中で、「子どもたちが、自分の認知特性や学習・生活スタイルを自己理解し、自分の強みを活用しながら、学び・生活していく姿」が醸成されることをねらいとしている。

子ども支援コーディネーターを中心に、子どもへの学習・生活相談や保護者との教育相談等を行い共通意識・理解のもと支援を進めている。

① 一貫教育の中で育てていきたいこと

	発達段階に応じた認知特性、 学習・生活スタイルの理解
初等部前期 幼:年少(4歳)~ 小:2年	誰(自分)にも得意なことと苦手なことがあることを知ることができるようにする。苦手なことがあっても大丈夫という安心感を持つ。支援者(保護者・教職員)が、子どもの特性を理解し支援する。
初等部後期 小:3年~小:5年	自分の得意・不得意をある程度理解する。学習や生活に、自分の得意なことを活用しようとする力を育てる。支援者と一緒に自分に合った方法を活用していく。
中等部 小:6年~中:3年	自分にあった学習・生活スタイルや認知特性の強みと弱みを理解して、強みを活用できるようにする力を育てる。支援者に相談しながら、自分でできることを増やしていく。

② 支援者(保護者・教職員)と共に歩む11年間



(文責 伊藤 英俊)